
デジモンアドベンチャーの世界に転生しよう

RIK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモンアドベンチャーの世界に転生しよう

【Nコード】

N1816Y

【作者名】

R I K

【あらすじ】

ありきたりなデジモン無印の転生物。

主人公は原作知識がありますが原作を変えるつもりはありません。ストーリーは原作沿いでオリジナル要素は少ないと思っています。

プロローグ

SIDE:???

俺は今真っ白な空間に立っている。正直訳がわからない。

『ひとまず落ち着いて状況を整理しよう』

まずは自分のことを思い出してみよう。

名前は睦^{むつき}希、男、17歳、高校2年生、容姿は中の中（もの凄く普通）、学力は地元でそこそ有名な進学校に入学できる程度。

『こんなもんか？ 特に忘れてることはなさそうだな』

次は今日？一日の行動を思い出そう。

確か午前中は学校でテストを受けて、午後は家に帰って明日のためにテスト勉強、夕方になって気分転換のついでに夕飯の買い出しに行っただったな。そして買い出しを終えた帰り道で……………

『そうだ！思い出したぞ。帰り道でトラックが突っ込んできたんだ』

ん？ つまり俺は死んだのか？ そしてここは死後の世界なのか？

「正解だ。ただ死後の世界ではなく、そこに至る途中だな」

俺が最後の瞬間を思い出していると、突然後ろから声が聞こえてきたので慌てて振り向くとそこには……………

『光の玉？』

光の玉が浮いていた。この状況もしかして神様か？

『小さい女の子やお爺さんの姿じゃないんだな』

ついつい本音が出てしまった。

「ふむ、確かに私は神でありどちらの姿にもなれるがそちらの方がいいか？」

やっぱり神様だったか。

『その姿のままで大丈夫です。そんなことより確認ですが私は死んだということではないんですか？』

先ほど『正解だ』と言われたし間違いないだが、念のため確認しておこう。

「その通りだ」

『・・・・・・』

予想してたとはいえ、はっきりと言われると動揺するな。

だけど死んでしまったものは仕方がない、両親には申し訳ないが前の人生にそれほど未練は無い。

「さて、改めて説明させてもらうぞ。まず君は私の部下のミスにより本来の運命とは違う形で死んでしまった。このことについては、私やミスをした者を含めた関係者全て謝罪する用意があるが……

……」

『必要ないです。前の人生にはそれほど未練はないので』

「わかった。では次に君の今後についてだが、謝罪の意味も込めてどこかの世界に転生してもらうことになるが、希望する世界はあるかな？ 無いようならこちらで決めさせてもらうが？」

転生か、どうするかな。

『いくつか確認したいんですが、漫画・アニメ・小説の世界でも可能ですか？ それから、転生する際に特別な力は授けてもらえますか？』

「どちらも可能だ。力については、限度があるがよほどのことがない限り望み通りの力を授けよう」

『れじゃあ、デジモンアドベンチャーの世界でお願いします。特別な力に関しては、選ばれし子供であることは当然として、前世の記憶があり原作の知識が劣化しないようにしてください。それから、パートナーはリュウダモンでお願いします。あ、あと前世での記憶の一部、思い出を消してください。』

どうせ行くなら一番好きな作品の世界だよね。パートナーに選んだリュウダモンは結構好きなデジモンんだけど、アニメやゲームで見たことが無いからぜひ動いてる姿を見たい。

「記憶を消す？可能だが何故？」

『転生後の不自然さを減らすためです。知識があるだけでも十分不自然だと思いますが少しはマシになるかと思って』

「なるほど、いいだろう。しかし記憶のことを除くと随分と控えめだな。他の者たちは自分が最強になれる力を望んでいたが」

他の者たち？　　いったい何人殺したんだ？

『私が行きたい世界は自分ではなくパートナーが戦う世界ですからね』

自分で言っておいて、この“パートナーが戦うから”という理由はどうかと思うけど、それについて冷めた言い方をすればギブ&ティクだと思っただよね。子供達はパートナーを進化させる（力を与える）、そしてパートナーは得た力で戦い子供達を守る。そんな考え方もできると思ってる。

もちろん俺はそんな冷めた考え方ではないけど。

『それに、あまり強すぎる力を持つと原作を破壊しかねないですから。私は原作通りの世界を楽しみたいですよ』

「わかった。では今から君の希望をまとめて書き出すから確認してくれ」

書き出す？……………あ、空中に文字が書かれていく。

世界・・・デジモンアドベンチャー

パートナー・・・リユウダモン

紋章・・・運命

転生時の変化・・・一部記憶の永久化、脳の強化、未来予知、エピソード記憶の消去

『ん？ 聞きたいことがあるんですがいいですか？』

「紋章や能力についてだろ？」

『はい』

「それについては今から説明する。念のため最初から確認していくぞ」

「転生先はデジモンアドベンチャーの世界、前世の記憶を持って選ばれし子供として転生、パートナーはリュウダモン、紋章は運命だ。紋章については未来を知っているという点から“運命”にした。次に能力だが『脳の強化』は前世の記憶を劣化させないため『未来予知』はサービスだ。運命の紋章にちなんで与えようと思っているが必要なければ消しておくぞ？」

『いえ、せっかくなので頂いておきます。ちなみにどの位の力があるんですか？』

「そうだな、初めのうちは数秒先の未来が見える程度だろうが、使い続ければある程度先の未来が見えるようになるだろう。ただし使い過ぎないように、強化してあるとはいえ使い過ぎれば脳にダメージがいくからな」

『わかりました、気をつけます』

この力はうまく使えば原作から話がズレたときに対応できそうだな。なにしろ俺の存在がイレギュラーだ、どんな影響があるかわからない。

「他に何もなければ後ろの扉をくぐりなさい。次に目が醒めたときには転生しているだろう」

俺が後ろを振り向くと何時の間にか扉が出現していた。

よかった、落下系じゃないんだな。

俺はそんなことを思いながら歩き出し、扉の前に立つと別れを言う為に振り向いた。

「ありがとうございました。行つてきます」

神様は特に何も言わなかったが、少しだけ光の強さが増した気がした。

俺はドアノブに手を掛けると一度深呼吸をしてから扉を開き歩き出した。

「気をつけて行ってこい」

扉をくぐった瞬間に遠くなりだした意識のなかで神様のそんな言葉が聞こえてきた気がした。

S I D E O U T

キャラ設定

名前 やがみ 八神 むつき 睦稀

年齢 8歳

性別 男

身長 ヒカリより2〜3cm高い

性格 冷静、明るい、前世の知識があるので少し大人びているところがある

家族 太一の弟でヒカリの双子の兄

相棒 リュウダモン

紋章 運命

備考

転生者で前世の知識と原作知識を持っている
転生時に未来予知（弱）の力を授かる
前世でのエピソード記憶を失っている
そのため勉強、運動共に卒無くこなせるが何が得意だったかは覚えていない
転生前も転生後も普通の少年で特殊な過去も無ければ現在抱えている悩みもない

キャラ設定（後書き）

容姿については考えていません。

“太一の弟でヒカリの双子の兄”ということ踏まえてご想像ください。

次回は原作1話。お楽しみに。

第一話（前書き）

記念すべき原作第一話目。

無駄に長くなってしまう。次からは少し圧縮しようかな。

当分は原作沿いでオリジナルは皆無なのでつまらないかな？

オリジナルが入っても原作は変えないのでつまらないかもしれないかもしれないが。

少しでも楽しんでもらえたら嬉しいです。

第一話

SIDE：睦稀^{むつき}

こんにちは、睦稀^{むつき}です。現在キャンプ場に来ています。物語が始まるまで時間があるので、転生後のことを説明しておきます。

なんと八神家に生まれました。太一の弟で光の双子の兄です。それから前世の思い出（エピソード記憶）は消えていて、自分からお願いしておきながら少し悲しくなっていました。未来予知の力はあまり使わなかったので変化無し。

『こんなところかな……ん？』

転生後のことを思い出していると、目の前に白いものが降ってきた。

『始まった』

僕はそう呟くと寄りかかって座っていた木の根元から立ち上がり荷物をまとめ始める。

次第に降雪が強くなり始めると慌てた様子で兄さんが降りて来て下にいた僕に声をかけてくる。

「睦稀、雪がやむまでそこに避難するぞ」

『わかった』

僕は石段の先にある神社に向けて走る兄さんを追いかけた。

~~~~~

石段を登った先にあつた建物の中に入るとそこには先客がいた。

「空にヤマト、光子郎もいるのか」

兄さんは先にいた何人かに声を掛けている。

兄さんが声を掛けた3人の他にも3人、全部で6人いるようだ。薄暗くてわかりにくいが原作通りのメンバーのようだ。

~~~~~

避難してから30分ほど経つと、次第に外が静かになり明るくなってきた。

兄さんが立ち上がり扉を開け外を確認している。

「やっと止んだみたいだな」

兄さんがそう言いながら外に出て行くと、みんなが立ち上がり兄さんの後に続く。

「アハハ、雪だ、凄〜い」

「おいタケル気をつける」

はしゃぎながら外に駆けて行くタケル君をヤマトさんが慌てた様子で追いかけて行く。

「寒いわね、夏とは思えない」

空さんは寒そうに震えながら出て行く。

「早く大人のいるところに帰ろう、ここにいつまでもいると」「キャー、綺麗!」

出口の前に立ち誰にともなく呟いた丈さんを押し退けて雪に感動した様子のミミさんが外へと駆け出して行く。

「ダメか、吹雪が止んだら電波届くと思ったのにな」

光子郎さんがパソコンと携帯を確認しているのを横目に見ながらみんなに続いて外に出ると、先に外に出ていた6人全員が空を見上げていた。

『これは………凄いな』

何が起きているのか知っている僕も、初めて見るオーロラにしばし某然としてしまった。

気を取り直し歩き出した僕は兄さんの横に並ぶ位置で立ち止まる。

「光子郎、早く来いよ」

僕が横に並んだのを確認した兄さんはこの場に居ない最後の一人を

呼んだ。

「あ、あれは」

しばらくすると後ろから驚きの声が聞こえてきた。どうやら光子郎さんが合流したようだ。

「初めて見たぜ」

「凄いいね」

『僕も初めて、感動するね』

兄さんとタケル君の言葉に僕も素直に賛同する。

「そんな変ですよ、日本でオーロラなんて」

「そうなのよね」

「早く大人の居るキャンプ場の方に戻らなきゃ」

「そうだな風邪引いちゃつまないしな」

落ち着いてきたのか光子郎さんと空さんは疑問を口にし、丈さんとヤマトさんはキャンプ場へ戻ることを提案する。

「おい、あれ」

そんな中オーロラを見続けていた兄さんが声をあげた。

『どうしたの兄さん？』

僕は兄さんに声をかけながらオーロラを見上げた。

「オーロラの向こうに渦みたいなのが見えるんだよ」

『本当だ』

僕たちのやりとりを聞いていた全員が見上げるのと同時に渦の中から8つの光が飛び出してきた。

「「「「「うわぁ！」「」「」「」

「「キヤー！！」「」

光は一直線に僕たちの元に飛んできると足元に落下し雪を巻き上げ周りを真っ白に染め上げた。

予想以上の迫力に思わず目を瞑り腕で顔を庇ってしまった。

「みんなケガは無い！？」

落下音がやみ視界が晴れる中、空さんがみんなに声をかける。

「なんとかな」

「ビックリしたあ」

「いったい……」

『全員無事みたいだね』

僕はあたりを見回し全員の無事を確認する。

「隕石？………えっ！？」

光子郎さんが足元にできた小さなクレーターを覗き込もうとした瞬間僕たちの目の前に光の柱が立ち上がりその中を小さな機械が浮上してくる。

「何？これ……」

「ポケベルでも携帯でもないし……」

僕以外の7人が突然の出来事に混乱している中。

『デジヴァイス』

僕は手元のデジヴァイスを見つめながら誰にも聞こえない小さな声で呟くとデジヴァイスを持つ手に力を込めた。
その瞬間、デジヴァイスの画面が光りだす。

「な、なんだ??」

兄さんの困惑した声が聞こえてくる。

どうやら全員のデジヴァイスが光だしたようだ。

（ついに始まるんだ）

僕がそう思ったとき、目の前に巨大な瀑布が出現した。
全員が突如現れた水の壁に某然とするなか水の壁は真ん中から二つ

に別れた。

僕たちは強力な力に引つ張られ先の見えない裂け目の中に吸い込まれていった。

僕はこれから始まる冒険に期待に胸を膨らませながら強い衝撃を受けて意識を失ってしまった。

~~~~~

「ムツキ、起きろよムツキ」

ゆっくりと意識が浮上するなか、初めて聞く声が僕の名前を呼んでいる。

『うゝん……………！？』

呼びかける声に応えるために重い瞼を開けると、声の主が目の前におり思わず声をあげそうになったがなんとか堪えることが出来た。

「あつ、やっと起きたか」

『あ、ああ、おはようキョキョモン』

「おう、おはよう……………ん？なんでオレの名前を知ってるんだ？」

仰向けになっている僕の胸のあたりで浮いているキョキョモンは僕の挨拶に答えた後、不思議そうに首をかしげながら疑問を口にする。

『それはね、僕には未来を視る力があつてキヨキヨモンと出会つてを知つてたからだよ』

心の中ではデジモンに出会えたことに感動しながら、表面上は平静を保ちキヨキヨモンの疑問に答える。

「へー、ムツキつて凄いなだな」

嘘は言っていないが、こんな嘘みたいな言葉を簡単に信じたキヨキヨモンに不安を抱かずにはいらなかった。

『そんなことより、キヨキヨモンは僕以外の人間は見かけてない？』

「人間？見てないよ」

気をとりなおして聞いた質問に返ってきた答えは予想通りのもので、『そうか』と応えながらキヨキヨモンを胸の上からどかし立ち上げる。

『とりあえずここを動こう。きっと僕の仲間も近くにいるはずだし』

そう言つて歩き出したとき、何か音が聞こえたようなきがしたので足を止め耳を澄ます。

「うわあー」

それが人の叫び声だと気づいたときには、丈さんが目の前を通り過ぎて行った。

『あれは！キヨキヨモン追いかけるよ』

「え？ちょ、ちょっと待って」

僕はキヨキヨモンに声をかけると丈さんを追いかけて走り出した。前を走る丈さんとそれを追いかけるポケモンが藪を抜けるのを確認し、僕も同じ用に藪を抜けると目の前に丈さんの背中があつた。

「『つぎやつ』」

「睦稀！？」

急のことで止まることが出来ず丈さんを巻き込み倒れてしまった。

『ごめんなさい。走ってる丈さんを見かけて、はぐれちゃいけない  
と思って追いかけてたら』

「だ、大丈夫だよ。ってそれどころじゃないんだ、さっきから変な  
ヤツに追われてて」

兄さんが僕の名前を呼んでいたがまずは丈さんに謝ることにした。  
ところが丈さんはぶつかつたことよりも追われていることの方が気  
になるようでポケモンが肩に登っているのに気づかず兄さん達にう  
つたえている。

「変なヤツじゃないよ、ポケモンだよ」

「うわぁ〜…………あれ？」

ポケモンに話しかけられ慌てて飛びのいた丈さんは僕達が慌てる様

子がないことに不思議そうな顔をする。  
そして僕たちの側にいる生き物に気付き再び慌てだす。

「な、なんだこいつら、いったい…」

その言葉を聞きポケモンは「クワッ」と鳴くと丈さんの肩から飛び降り、他のパートナーデジモンたちと横一列に並ぶとパートナーデジモンたちは声を揃える。

「……………僕達、デジタルモンスター……………」

「デジタルモンスター??」

『ひとまず自己紹介でもしない?お互いわからないことだらけみたいだし』

兄さんの訳がわからないという様子に苦笑しつつ話を進めるために自己紹介を提案する。

「そつだな」

兄さんの賛成をきっかけに僕たちはデジモンに対面する形で並ぶ。僕たちが並び終わるのを待ってデジモン側から自己紹介が始まる。

「ぼくコロモン」

「ツノモン…です」

「ピョコモンだよ」

「わてモチモンでんがな」

「ポケモンだよ、クワッ」

「ぼく、トコモン」

「オレはキョキョモン」

デジモンたちの自己紹介が終わり、次は僕たちの番になる。

「俺は八神<sup>やがみ</sup> 太一<sup>たいち</sup>、お台場小学校の5年生だ」

名乗り終えると兄さんは横を向き空さんの紹介を始める。

「同じ5年生の空」

「武之内<sup>たけのうち</sup> 空よ<sup>そら</sup>、よろしくね」

「やっぱり同じ5年生のヤマト」

「石田<sup>いしだ</sup> ヤマトだ」

「そっちは丈」

「城戸<sup>きど</sup> 丈<sup>じょう</sup>、6年だ」

「4年の光子郎」

「泉<sup>いずみ</sup> 光子郎です」

「それから俺の弟で2年の睦稀」

「八神<sup>やがみ</sup> 睦稀<sup>むつき</sup>だよ、よろしく」

「えーと、それから……」



「『『『『『』!?!?』』』』』」

「クワガーモンだ」

しかし姿を現したのはミミさんだけではなかった。

奇怪な鳴き声をあげながらクワガーモンが僕たちの頭上を通り過ぎていく。

「ミミ、大丈夫？」

「タネモン……」

ミミさんは呆然とした様子で座り込んでしまい、タネモンが心配そうに声をかける。

「しっかりして！」

「空さん！」

座り込んだミミさんの元に空さんが駆け寄り声をかける。

「またくるぞ！」

「さあ立って」

クワガーモンが向きを変え再びこちらに向かってくると空さんがミミさんと立ち上がりせ走り出す。

僕たちも後に続くがあっという間に追いつかれてしまう。

「伏せる！」

クワガーモンが背後に迫ったときヤマトさんが叫びタケル君を抱えて地面に伏せる。

僕も同じように頭を抱えて伏せるとカワガーモンが目の前の木を切り倒しながら頭上を通過していく。

「いったい、ここはどういう所なんだ」

「また来る」

「クソッ！あんな奴に負けてたまるか」

丈さんが呆然とした様子で呟くなかクワガーモンが飛んでくることがピョコモンが警告する。

すると兄さんが勢いよく立ち上がりクワガーモンに立ち向かうよう一歩踏み出す。

「太一、無理よ！」

「そうだ、俺たちは何の武器も無いんだぞ！」

『兄さん！危ないからやめて！』

慌てて空さんが止めに入るとヤマトさんも同じように兄さんを止める。

僕も2人に続き兄さんを止めるために声をかける。

「ここは逃げるしか」

僕たちの言葉に兄さんは悔しそうに拳を握り締めながら光子郎さんの言葉に促される形で再び走り出す。

「あつ!!」

クワガーモンが背後に迫る音を聴きながら必死に走っていると森を出た所で少し離れて先頭を走っていた兄さんが声を上げて立ち止まる。

兄さんの近くに行くと目の前は崖になっており下には川が流れていた。

「こっちは駄目だ。別の道を探すんだ!」

「別の道って……」

兄さんの言葉に空さんは呆然と辺りを見渡す。

ひとまず元の道に戻ろうかと皆が後ろに振り返ると背後の森が揺れクワガーモンが飛び出してくる。

「……うわっ!」

「きゃっ!」

頭上を通過したクワガーモンはUターンし戻ってくる。

皆から少し離れていた僕と兄さんが標的になり慌てて逃げ出すが逃げられそうにない。

(駄目だ、逃げられない)

「太一!」

「ムツキ！」

諦めかけた瞬間、皆の元からコロモンとキョキョモンが飛び出してくる。

「プッ！」

「メタルストロー！」

僕たちとすれ違いながら背後に迫るクワガーモンに必殺技を放つがダメージはなく、わずかに飛行の軌道をずらすしかできなかった。

「「うわっ！」」

「コロモン！」

『キョキョモン！』

クワガーモンの体当たりを受けた2体は弾き飛ばされてしまう。

僕と兄さんはパートナーに駆け寄り抱き上げる。

背後ではクワガーモンが標的を変え後ろにいた皆に迫っていた。

全員が立ちすくむなかパートナーデジモンたちが飛び出し6体で一斉にクワガーモンにむけてアワを放つ。

大量のアワにコントロールを失ったクワガーモンはパートナーデジモンたちを弾き飛ばしながら森の中に突っ込んでいく。

「ピョコモン！」

頭を抱えて伏せていた皆はピョコモンの元に駆け寄った空さんに続

きそれぞれのパートナーのもとに駆け寄る。

「馬鹿やろう、なんて無茶を」

「だって、ぼくは太一を守らなきゃ」

「コロモン」

兄さんは心配そうにコロモンに声をかけるとコロモンは少し弱った様子で答える。

わかっていたこと、進化に必要なことだとしてもパートナーが傷つくのは辛い。

そんなやり取りを横で聞きながら僕はキョキョモンを強く抱きしめる。

少し離れたところでは駆け寄った六人がパートナーを抱き上げながら心配そうに声をかけている。

「ピョコモン」

「タネモン、大丈夫？」

「どうしてあんなことを」

「トコモン、トコモン」

「しっかりしろ、ツノモン」

「プカモン、お前」

全員が落ち込む中、森の中から不気味な泣き声が聞こえてくると木

を何本も吹き飛ばしながらクワガーモンが再び姿を現す。

離れていた6人が僕たちの元に駆け寄るなかクワガーモンは巨大な顎を動かしながらゆっくりと僕たちとの距離を縮めてくる。

僕たちはクワガーモンから少しでも離れようとするが背後は崖になつておりすぐに行き止まりになる。

「くそつ、このままじゃ」

「行かなきゃ」

「え!？」

「僕たちが戦わなきゃいけないんだ」

クワガーモンがさらに迫る中コロモンが“戦う”と言い出し兄さんの腕の中から飛び出そうとする。

「なに言ってるんだよ」

「そうや、わいらはそのために待ったんや!」

「そんな…」

「行くわ!」

「無茶よ、あなた達が束になってもアイツに敵うはずないわ」

コロモンに続くようにモチモンとピョコモンもクワガーモンに立ち向かおうとする。

空さんが必死に説得するがピョコモンたちは諦めようとしない。

「でも行かなきゃ！」

「おい」

「ボクもー！」

「おいらも！」

「タネモン、あなたも？」

「ミミ」

『キョキョモン、行くんだね』

「うん」

「行くぞー！！」

皆がクワガーモンに向かって行こうとするパートナーを抱きしめ行かせまいとする中、僕はキョキョモンを抱きしめていた腕の力を緩める。

キョキョモンが僕の腕の中から飛び出すのと同時にコロモンも兄さんの腕の中から飛び出し皆に聞こえるように叫ぶ。

「ピョコモン！」

「モチモン！」

「ツノモン！」

「トコモン！」

「プカモン！」

「タネモン！」

コロモンとキョキョモンに続くように他の6体もパートナーの腕を振り切りカワガーモンに向かって行く。

『キョキョモン、大丈夫だって信じてるよ！』

「コロモーン！」

僕がキョキョモンの背中に声をかけ兄さんがコロモンの名前を叫んだとき、突然空が暗くなり8本の光の柱が8のデジモンを包み込む。

「コロモン進化！……アゲモン！」

「ピョコモン進化！……ピヨモン！」

「モチモン進化！……テントモン！」

「ツノモン進化！……ガブモン！」

「トコモン進化！……パタモン！」

「プカモン進化！……ゴマモン！」

「タネモン進化！……パルモン！」

「キヨキヨモン進化！……リュウダモン！」

「皆、行くぞ！」

全員が進化を終えるとアゲモンを先頭にクワガーモンに飛び掛る。  
しかし相手は成熟期、顎の一振りですべて弾かれてしまう。

「あ！」

「これくらい大丈夫！」

声をあげた兄さんを安心させるようにすぐに立ち上がり再びアゲモンたちはクワガーモンに立ち向かっていく。

「ポイズンアイビー！」

飛び立とうとしたクワガーモンの足にパルモンの蔓が絡みつき少し浮いたところで上昇が止まる。

「エアースョット！」

「プチサンダー！」

「いあいじん  
居合刃」

パルモンが動きを止めている隙にパタモンとテントモンがクワガーモンの頭に必殺技を放ち、飛び上がったリュウダモンが羽に必殺技を放つ。

4体の攻撃にクワガーモンは飛行状態を維持できなくなりよろけな

がら地面に降りようとした瞬間ゴマモンが足元に転がり込み足をはらう。

「みんな離れろ、ベビーフレイム！」

「プチファイアー！」

「マジカルファイアー！」

膝をついたクワガーモンに3体の必殺技が直撃するが倒すには至らない。

「よし、もう一度だ」

そう言い攻撃するアグモンに続きガブモン、テントモン、ピヨモン、パタモンが必殺技を放つ。

5体の一斉攻撃を受けてクワガーモンの上半身に火がつきクワガーモンは苦しそうな泣き声をあげながら背後の森に倒れるようにして消えていった。

「やったー！」

全員が呆然とするなか最初に声をあげたのは兄さんだった。

「太ー」

「うわゝ、お前凄いで良くやった」

駆け出した兄さんは同じく駆け寄ってきたアグモンと抱き合っ喜び合っている。

その横を他のデジモンたちが駆け抜けてそれぞれのパートナーのもとに走り寄る。

『お疲れ様、勝つって信じてたよりユウダモン』

「当たり前だろ……このことも未来予知で知ってたの？」

『どっちだろうね、今は秘密だよ。もっと落ち着いたところに話すよ』  
皆が勝利を喜び合っているなか、僕は駆け寄ってきたリュウダモンに労いの言葉をかける。

名前を呼んだことで最初の出会いを思い出したのか聞いてきたリュウダモンの質問に今は曖昧に答えておく。

最初からリュウダモンには自分のことを話すつもりだったが、今はまだクワガーモンのイベントが終わっていない。

そんな僕の答えに少し不満そうだったがなんとか納得してもらえた。

「太一!!」

突然聞こえた空さんの叫び声に兄さんの方を見ると先ほどのクワガーモンが立ち上がり兄さんとアグモンに顎を振り下ろそうとしていた。

『兄さん早くこっちに!!』

慌ててこちらに逃げてきた兄さんの背後でクワガーモンの顎が地面に突き刺さる。

すると顎の刺さった部分から地面に亀裂が走り僕たちの足元が揺れ始める。

「「「「『うわっ!』」「」「」

「「きゃっ!」「」

揺れはしだいに大きくなり、ついに地面が崩れはじめた。

「「「「『うわー!』」「」「」

「「キヤー!」「」

足場を失った僕たちは崖の上から遙か下にある川に落下していった。

SIDE:OUT

## 第一話（後書き）

次回は原作第二話目。

なのですが、全く書けていません。

土日で頑張ります。まずはDVDを見ないと。

はたしてこの小説を読んでくれる人はいるのでしょうか？

果てしなく不安ですが当分は自己満足のために頑張ります。

勿論、読んでくださる方がいればその方達に満足していただけるように頑張るつもりです。

## 第二話（前書き）

原作第二話。

また長くなってしまいました。

少しでも楽しんで頂けたら幸いです。

## 第二話

SIDE：睦稀<sup>むつき</sup>

崖の上から落ちた僕たちはゴマモンの“マーチングフィッシューズ”によって水の中に落ちることは回避できたが、後から落ちてきた崩れた崖の一部によって発生した波に打ち上げられるようにして川岸へと放り出されていた。

「なんだっ たんださっきの魚は」

岸に打ち上げられ一息ついたところで丈さんが疲れた様子で呟くと、それを聞いたゴマモンが丈さんに近づき話しかける。

「あれはね、マーチングフィッシューズさ」

「え？」

「おいら魚を自由に操ることができるのさ」

「そうかお前のおかげだったのか、ありがとうポケモン…じゃなくて……」

自慢げに話すゴマモンにお礼を言う丈さんだが進化たパートナーの名前がわからず困惑した様子になる。

「ゴマモンだよ」

「ゴマモン？」

「どうなっちゃったの？トコモンは」

「今はパタモンだよ」

丈さんとゴマモンのやり取りを聞きタケル君がパタモンに話しかけそれにパタモンが答える。

「僕たち進化したんだ」

「進化？なんだ進化って」

アグモンの言葉に意味がわからないといった様子の兄さんがアグモンに聞き返すがそれに答えたのは光子郎さんだった。

「普通はある生物の種全体が、より高度な種に変化することですけど」

「そうですね、その進化。わいはモチモンからテントモンに」

「私はピヨコモンからピヨモンに」

「オレはツノモンからガブモンに」

「ワタシはタネモンからパールモンに」

「そして僕はコロモンからアグモンになったんだ」

「ふーん、とにかく前より強くなったみたいだな」

テントモンが光子郎さんの説明を肯定し自分の名前を教えると他のデジモンたちもそれぞれのパートナーに自分の名前を教えている。そんな説明を兄さんは興味なさそうに自分なりに結論付ける。

『進化つて言うより変身みたいだね』

「確かに以前の面影もあまり無いようですし。それにほんらい進化には膨大な時間が必要です」

デジモンたちの幼年期の姿と今の姿を比べて出た感想に光子郎さんが頷きながらさらに不自然な点を指摘する。

「その、進化してもデジタルモンスターなのか？」

「そうだよ、太一と会えて良かったよ」

「え、なんで？」

「僕は自分だけだと進化できなかったんだ。きっと太一と会ったおかげで進化できたんだよ」

「ふ〜ん」

兄さんの疑問にアグモンは嬉しそうに話しているが兄さんの方はあまり興味がなさそうだった。

「え、じゃあピヨモンも？」

「そう」

「みんなそうなのかな？」

「そうですね」

「ミミのおかげよ」

「おかげって言われてもね」

「俺もムツキのおかげで進化できたんだぜ」

『そっか、力になれて良かったよ』

アグモンの言葉を聞いた空さんがピヨモンに確かめるとピヨモンは嬉しそうに頷いた。

僕もリュウダモンの言葉に嬉しくなり笑顔で返事をする。

「もう元には戻らないの？」

「うっん、たぶん」

タケル君の質問にパタモンはハッキリしない様子で答える。

「なんだかよくわからないな」

「おいら達にもよくわからないんだよ」

「うっん」

皆の話を聞いた丈さんは腕を組みうなり声をあげて考え始める。

「それより、これからどうする」

「元の場所に戻ろう。大人達が助けに来るのを待つんだ」

「戻るって言ってもなあ」

『ちょっと難しそうだよね』

ヤマトさんが話題を変えるように皆に聞くと、考えるのを中断した丈さんが提案する。

そんな丈さんの提案に兄さんは背後を振り返り難しそうに答える。兄さんの視線の先にあるものを僕も見上げ言葉を漏らす。

皆の視線の先にはさっき落ちたばかりの場所、高い山が聳え立っていた。

「ずいぶん流されちゃったし」

「崖のうえにまで戻るのは簡単じゃなさそうだが」

「じゃあ、どうしたらいいんだ？……どこか道を探して」

考えを否定された丈さんは再び考え始める。

「だいたいここは何処なんだ、どう考えてみてもキャンプ場の近くじゃないぜ」

「そうですね、植物がまるで亜熱帯みたいだ」

「ほんまや〜」

「え！わかるの！？」

「いや」

考え始めた丈さんを見回してヤマトさんは疑問を口にする。

辺りを見回しながら呟いた言葉に対するテントモンの反応に驚いた光子郎さんは慌てて確認するが帰ってきた言葉に肩をガツクリと落とした。

「降りてきたんだから戻る道はあるはずだ」

「そうね、とにかく戻ってみればどうしてこんなところに来たのか何か手掛かりが有るかも」

再び戻ることを提案する丈さんに今度は空さんも賛成する。

「えー！？でもさっきみたいなのが他にもいるんじゃない？」

「いるわよ」

「ほら！」

「危険は冒したくないな」

丈さんと空さんの意見に座り込んだミミさんが不安そうに確認すがパルモンの返事を聞いたミミさんは嫌そうに声をあげヤマトさんも反対する。

「他の人間は？」

「人間？太一みたいな？」

「うん」

「見たことないよ、ここはデジモンしかないんだ」

他の可能性を探すようにした兄さんの質問もアグモンの答えによって否定されてしまう。

「確かファイル島って言ってたわよね？」

「本当に島なのか？」

「聞いたこと無い名前ですね」

「日本じゃないのかな？」

人間の存在を否定され、次に今いる場所について考え始める。

「とにかく行こうぜ。ここでじっとしていてもしょうがないよ」

「どこに行く気だ」

4人の考えを遮るように声をあげ歩き出した兄さんと一緒に僕とアグモン、リュウダモンも歩き出す。

そんな僕達を引き止めるようにヤマトさんが兄さんに問い掛ける。

「さっき海が見えたんだよ」

「海？」

「そう、だから行ってみようぜ」

ヤマトさんに振り向きながら答えて皆を促し再びアグモンと一緒に歩き出す。

僕も兄さんの後に着いてリュウダモンと歩き出す。

「行ってみるか」

「ええ」

後ろではヤマトさんと空さんが話し合いパートナーと一緒に僕達を追いかけて歩き出す。

残された丈さん以外の3人もヤマトさんたちと一緒に移動を始め丈さんだけが残された。

「こういうときはできるだけじっとして大人の助けが来るのを待つんだ。そのためには元いたところに「丈」早くおいでよ」おい、待ってくれよ」

後ろの丈さんとゴマモンのやり取りを聞きながら僕は兄さんに話しかける。

『いつの間に海なんて見つけたの?』

「睦稀と合流する前に木に登ってコレを使ってたら偶然見つけたんだ」

そう言って兄さんがポケットから単眼鏡を取り出してみせる。

『それ使ってくれてるんだ嬉しいな』

「睦稀とヒカリからのプレゼントだからな」

「プレゼント？」

僕と兄さんのやり取りを聞いて不思議そうにアグモンが聞いてくる。

『この単眼鏡は兄さんの前回の誕生日に僕とヒカリが選んでプレゼントしたんだ』

「へへ」

僕の答えにアグモンとリュウダモンが、なるほどといった様子になる。

そんなやり取りをしているうちに後ろにいた皆が追いつき、僕達は立て一列になって川沿いを海に向けて歩き続ける。

~~~~~  
~~~~~

しばらく皆で話しながら歩いていると突然ガブモンが足を止め鼻を動かしはじめる。

「??海の匂いがしてきた」

「お、見えたよ、海だーい」

ガブモンとゴマモンの言う通り遠くに海が見えてきた。

「ああ？」

「こんなところで電話の音」

さらに海に近づいたとき突然聞きなれた音が僕達の耳に届いた。  
走り出した兄さんに続き僕も走り出す。

「ハアハア」

たどり着いた浜辺には何台もの電話ボックスが並んでいた。  
真っ先にたどり着いた兄さんが電話ボックスに駆け寄り扉を開けた  
ところで動きを止める。

「どうした太一」

「止まった」

動きを止めた兄さんに不思議そうに聞いたアグモンに兄さんは困惑  
した様子で答える。

兄さんの言う通り先ほどまで鳴り響いていた電話の音が鳴り止んで  
いる。

「こんな所に電話ボックスになんて」

「不合理です」

ひとまず電話から離れ浜辺に並ぶ電話ボックスについて話し合う。

「でもこれはいつも見てる電話ボックスだな普通の」

「あたしの家のそばにもあるわ」

「ということはここは……ここは日本なんだ！」

空さんと光子郎さんの否定的な意見に対抗するようなヤマトさんとミミさんの言葉を聞き丈さんが力説する。

「にほん？ 丈なんだそれ」

「……………やっぱり違うかも」

丈さんの言葉に“初めて聞いた”という様子で聞き返すゴマモン。そんなゴマモンたちデジモン（日本に居るはずのない生物）をしばし見つめた丈さんは自分の意見を自分で否定する。

「光子郎、10円貸してくれよ」

「え？ 何するんですか？」

「決まってんだろ、電話掛けるんだよ家に」

「ああ、それならテレカありますよ」

結論が出ずに皆が沈黙するなか、兄さんが電話ボックスに手を掛けながら光子郎さんに話しかける。

「あ、ボクもママに」

「あたしも」

「それでは僕も」

「おいタケル」

「私も」

「空君まで」

電話を掛け始めた兄さんに続くように皆がそれぞれ空いている電話ボックスに入り電話を掛け始める。  
僕はそんな様子を少し離れた所で眺めている。

「ムツキは電話掛けないのか？」

『僕の掛けたいところは兄さんと同じだからここは兄さんに任せるよ』

「ふ〜ん……っ！」

電話を掛ける様子がない僕を不思議に思ったのか、聞いてきたリュウダモンの質問に答えていると突然リュウダモンのお腹が鳴り出した。

『お腹すいたの？』

「……」

質問にリュウダモンが無言で頷いたのを確認して僕は肩から提げた

小さめの鞆から1本のチョコバーを取り出し袋を開けて差し出す。

「……………食べていいのか？」

『もちろん』

僕の顔と手元を交互に見ながらリュウダモンが聞いてくるので頷きながら答える。

それでも食べる様子が無いリュウダモンに苦笑して少し強引に口の中にチョコバーを放り込んだ。

「……………おいしい、でも俺が食べても良かったのか？」

『うん、心配しなくてももう1本あるから大丈夫だよ。それにいつまでも食べずにいると駄目になっちゃうからね』

突然チョコバーを口に放り込まれたリュウダモンは、最初は吃驚した様子だったが美味しいことに気づきゆっくりと飲み込んだ後心配そうに聞いてくる。

そんなリュウダモンを安心させるように鞆からもう1本のチョコバーを取り出し食べながら答える。

そんなやり取りをしているうちに電話が通じないとわかったのか、丈さんを残した皆がこちらに歩いてきた。

『どうだった？』

「全然ダメだ」

近づいてきた兄さんに声を掛けると疲れた様子で答えてくる。

皆が同じような表情で、何人かは座りこんでしまっ。

（電話を見つけて助かる可能性が見えただけにショックも大きいんだろっな）

皆の様子を見てそんなことを思いながら、いまだに電話を掛け続ける丈さんを見る。

「これならどうだ！……じゃあ次は」

やけくそ気味に電話を掛ける丈さんを僕達は無言で見ていると光子郎さんが呆れたように言葉を漏らす。

「結構しつこい性格してるんですね」

「丈らしいよ」

光子郎さんの言葉に兄さんは初めからわかっていたように苦笑しながら答える。

「もう諦めて移動しようぜ」

「ちょっとまで、掛けられなくても向こうから掛かってくる可能性があるんじゃないか、さっきみたいに」

移動しようとした立ち上がった兄さんにヤマトさんが反対する。

「ここでもじっとしていても時間の無駄だよ」

「しばらく様子を見たらどうだと言ってるんだ、みんな疲れてるん

だぞ」

それでもまだ移動を主張する兄さんだがヤマトさんの言葉に周りの仲間の様子を確認する。

タケル君とミニさんは座り込み疲れた様子だ。

「お腹も減ってきましたしね」

「そうだな、お昼もまだだったもんな……よし！休憩だ休憩」

光子郎さんの言葉が決め手になったのか兄さんは休憩を宣言する。その言葉に空さんは安堵したように息を吐いてから皆に話しかける。

「誰か食べるもの持ってる？私が持つてるのはこの……あれ？」

腰のポーチに手を伸ばした空さんはポーチのベルトに付いていたデジヴァイスに気づき外して手に持つ。

「これって、あのとき空から降ってきた」

「あ、それ……俺も持ってたまだ」

『それなら僕も』

空さんに続き兄さんもベルトからデジヴァイスを外し手に持つ。僕も服の裾を捲り腰のベルトに着けたデジヴァイスを見せる。

「あたしのバックにも着いてる」

「僕も持つてるよ」

「みんな持ったままだったのか」

「どうやらこれはなにかの……ところで誰か食べ物をつて話でしたよね」

この場に居る全員がデジヴァイスの存在を確認し、光子郎さんが何か意見を言おうとしたところでお腹が鳴ったため光子郎さんは話を元に戻した。

その後、皆の荷物の確認を行いそのなかで光子郎さんの電子機器に兄さんが呆れ、タケル君がヤマトさんを“お兄ちゃん”と呼びそれにヤマトさんが複雑そうに答え、ミミさんのバックから大量のサバイバル用品が出てきたことに全員が驚いたり呆れたりした。

「ところで、丈はまだ電話してるけど食い物なんて持ってきてない……あれ！あれ非常食だ」

この場に居る全員の荷物の確認を終え最後に残った、いまだに電話を掛け続ける丈さんを見た兄さんが驚きの声をあげる。

「おい丈、非常食持ってるじゃないか」

「え？なんで僕がそんなもの持たなきゃいけないんだよ」

「だってそのバック」

「バック？そうだこれをミミ君に届けに行くところだったんだ」

声を掛けられた丈さんは初め意味がわからないといった様子だった

が、光子郎さんの指摘でバックの存在を思い出しミニさんの元に駆け寄って来た。

「あたし？」

「ミニ君、君は非常食当番だったろちゃんと管理しておかなきゃダメじゃないか」

不思議そうに聞いてくるミニさんに丈さんはバックを差し出して抗議する。

「えゝ、だって重たいし」

「そついう我儘言ってるから」

「まあまあ、食べ物があるってわかっただけでもめっけもんだ。昼飯にしようぜ」

言い争いになりそなところに兄さんが割って入り丈さんをなだめることで場を収める。

その後、輪になって座り直し非常食の分配について話し合いを始める。

「非常食は1班につき3日分支給されている。僕の班は7人だったから、 $7 \times 3 \times 3$ で「63食ですね」…そうだ、これを8人で分けて食べると「2日半ですね」…そうだ」

丈さんの話の中に出てくる計算を光子郎さんが即座に答えるたびに丈さんが複雑な顔をしている。

「でもデジモンたちの分があるから実際にはその半分の1日半ちよつとよ」

僕は空さんのそんな言葉を聞きながら輪から少し外れたところにいる兄さんに近寄り話しかける。

『兄さん、それは人間の分だよ。アグモンにあげていいの?』

「いいんだよ、それに睦稀もリュウダモンに食いもんあげてただろ」

『見てたの?』

「偶然な」

あの行為を見られていたことに驚いて聞き返すと兄さんは平然と答えてアグモンに非常食を食べさせ始める。

「どうだ、美味いかアグモン」

「うん」

兄さんの質問に非常食を頼張り嬉しそうに頷くアグモン。するとその行為を目撃した丈さんが兄さんを注意する。

「だからそれは人間用!」

「いいじゃないかケチだな」

「ダメ!睦稀君も気づいていたなら止めてくれ」

「一応止めたんですけど」

丈さんは注意に文句で答える兄さんにもう一度注意して矛先を僕に向ける。

自分も同じ行為をしているとは言えず、苦笑しながら曖昧に答える。

そんなやり取りをしていると突然ピヨモンが立ち上がり海の方を睨みつける。

「どうしたのピヨモン」

「来る」

「!?!」

「な、なんだ!？」

空さんの質問に海を見つめたままのピヨモンが答えるのと同時に砂の中から水が噴水のように吹き出してきた。

水の柱はそのまま移動し砂浜に立ち並ぶ電話ボックスを全て吹き飛ばしていく。

僕達は慌てて電話ボックスから少しでも離れようと走り出す。

全ての電話ボックスを吹き飛ばした水の柱が消え、次の瞬間砂を巻き上げながら巨大な巻貝が出現する。

「シエ、シエルモンや」

「シエルモン!？」

「この辺はアイツの縄張りやっ たんか」

テントモンと光子郎さんのやり取りのなか、巻貝の中からシエルモンの本体が現れ、鳴き声をあげる。

「みんなこつちへ」

シエルモンがゆっくりと近づいてくると、丈さんが皆を促し、一人背後の崖を上り始める。

するとシエルモンは動きを止め、イソギンチャクのようにになっている。頭頂部を丈さんに向け、ハイドロプレスチャーを放った。

「のわ！」

大量の水に崖に掴まっていることができず、落下してしまう。

「丈ー！……うわぁ！」

海面にいたゴマモンが、丈さんの名前を叫ぶと、シエルモンは標的を変え、ゴマモンにハイドロプレスチャーを放ち、直撃を受けたゴマモンは海の中に沈んでいく。

「みんな行くぞ！」

「頼んだぞアグモン！」

そんなシエルモンに向け、アグモンが駆けて行き、他のデジモンたちも後に続く。

「ベビーフレイム！」

「プチファイア…あれ？」

「マジカルファイア…??」

「プチサンダ…?」

「どうしたんです？」

「技が全然出てない！」

『リュウダモン！』

「任せろ！…居合い刃！」

アグモンの技によって怯んだシエルモンに追撃しようとした3体は技を放つことができず光子郎さんとヤマトさんは困惑した様子で問いかける。

それを見た僕がリュウダモンに声をかけると、それに答えたりユウダモンがシエルモンの顎下に潜り込み飛び上がりながら技を放ち少し離れたところに着地する。

しかし技を受けたシエルモンはダメージが無かったように頭頂部をデジモンたちに向けるとハイドロプレッシャーを放ち攻撃に参加した5体を吹き飛ばす。

「アグモン！」

『リュウダモン！』

「クソッ！」

「ッ！」

僕と兄さんが心配そうにパートナーの名前を呼ぶとアグモンはすぐに立ち上がりシエルモンに向かって行く。

リュウダモンは一番近くで技を受けたせいか、苦しそうだが立ち上がる。

「エアースョット……うわ！」

「ポイズンアイビィ……キヤー！」

その間、残ったパタモンとパルモンが攻撃しようとするが、やはり技が出ずシエルモンに弾き飛ばされてしまう。

「ベビーフレイム」

「いいぞアグモン」

アグモンのみが戦っているなか、僕達はそれぞれのパートナーに駆け寄り声をかける。

「なぜアグモンだけが」

「すんまへん、腹減って」

「え？」

「ガブモン」

「力がでない」

「そうか！アグモンはさっきご飯食べたから」

「なるほど、じゃあリュウダモンは」

「詮索は後だ。それより他のデジモンに戦う力は無いつて言うのか？」

『リュウダモン、大丈夫？』

「大丈夫、まだ戦える」

後ろで光子郎さん達の話し声が聞こえてくるが、そちらには答えずリュウダモンに背中に手を置きながら話しかける。

「アグモン、俺達だけでなんとかするぞ！」

「わかった太一！」

ヤマトさんの言葉を聞いた兄さんがシエルモンの右側に走り出した。

「太一！」

『兄さん！』

「ほら、こっちだシエルモン！」

「ベビーフレイム！」

シエルモンが兄さんのほうに気を取られている隙に反対側のアグモ

ンが必殺技を放つ。

兄さんはシエルモンが怯んだ隙に電話ボックスの残骸の中から金属の棒を拾い上げてそれを使いシエルモンに攻撃する。

「どうだ、このこの！……う、うわぁ！」

「太一！」

攻撃することに夢中になっていた兄さんは伸びてきた触手に気づかずには捕まってしまう、助けようと駆け寄ったアグモンもシエルモンの手に捕まり砂浜に押さえつけられてしまう。

兄さんとアグモンを封じたシエルモンが頭頂部を僕たちの方に向けるとハイドロプレッシャーを放つ。

「……うわっ」「」「」

「「キヤー」「」

「『っ！！』」

僕とリュウダモンは何とか躲すことができたが後ろの6人とパートナーが攻撃を受けて弾かれる。

『兄さん！』

「ムツキ！！居合い刃！」

僕の声にシエルモンが反応し触手を伸ばしてくるが、すぐに反応したリュウダモンが必殺技で触手を弾く。

「クソッ、このままじゃ皆が、なんとかならないのか……うわぁ！」

「太一！」

なんとか抜け出そうとする兄さんだが締め付けが更にきつくなる。そんな兄さんの名前をアグモンが叫びながらもがくが拘束が緩む様子はない。

「アグモーン！」

「太一！」

兄さんとアグモンがお互いの名前を叫んだ時、兄さんの腰にあるデジヴァイスが反応しアグモンを光が包む。

「な、なんだ!？」

「アグモン進化!……グレイモン！」

兄さんが困惑した声を上げるなか、光に包まれたアグモンが巨大化する。

押さえつけられなくなったシエルモンがバランスを崩すと捕まっていた兄さんが放り出され叫び声をあげながら砂浜を転がる。

「また進化、グレイモンだって？」

すぐに立ち上がった兄さんが呟く。

視線の先、少し離れたところではグレイモンとシエルモンが静かに対峙していた。

わずかな沈黙のあと、最初に動いたのはシエルモンだった。  
シエルモンはグレイモンに体当たりするように突っ込むがグレイモンは難なく受け止める。

「頑張れ、グレイモン！」

受け止められたシエルモンは至近距離からハイドロプレスチャーを放つが、グレイモンはそれをよけて口から炎を放ちハイドロプレスチャーを相殺する。  
しだいに押され始めたシエルモンが技を止めると、即座にグレイモンがシエルモンの懷に潜り込み頭の角を使いシエルモンを空高く放り投げる。

「メガフレイム！」

空中で身動きが取れないシエルモンにグレイモンが必殺技を放つ。  
直撃を受けたシエルモンは海の沖の方に吹き飛ばされていった。

「は！」

シエルモンを倒したグレイモンが光を放ちながら小さくなるのを見た兄さんは慌てて駆け寄る。

「アグモン！……戻ったんだ、大丈夫か？アグモン」

グレイモンからアグモンに退化し倒れ伏したアグモンに心配そうに兄さんが声をかけると、アグモンが疲れきった様子で兄さんを見上げながらうつたえる。

「太一い……腹減った」

そんなアグモンの答えに兄さんは安堵したように笑い声を上げた。

~~~~~

その後シエルモンの襲撃でバラバラになった荷物をまとめたりしてから皆で集まりデジモン達の食事の時間となった。

「もしもし、もしもし！」

「さあ、どんどん食べてね」

「ここにいる理由はなくなったな」

「ああ」

デジモン達が食事をしている横で必死に壊れた受話器に声をかける丈さんとその周りの残骸を見ながら兄さんが話し始める。

「シエルモンも完全に倒したわけではありません。また襲ってくるまえにここから離れた方が良いと思います」

「確かにな」

「だったらやっぱりあの森に戻ろう、僕らが最初にやってきた森だよ。あそこで助けを待とう」

光子郎さんが危険性を指摘するとヤマトさんが頷き賛成し、その言葉を何時の間にか近くにいた丈さんが聞き提案する。

「前にも言ったけど私達、崖から落ちて川を下ったのよ。そう簡単には戻れないわ」

「クワガーモンは嫌！」

しかし丈さんの提案は空さんとミミさんによって否定される。

「ここに電話があったということは誰か設置した人間がいるはずで
す。その人間を探した方がいいかもしれません」

「なるほど」

「私もその意見に賛成」

一度は否定された人間の存在だったが、電話ボックスの存在で再び可能性を感じた光子郎さんの意見に皆が賛成する。

「よし、それで行こう！」

「僕は太一の行くところだったら何処にでも行くよ」

「ありがとうよ、アゲモン」

「ムツキ、俺もムツキに着いて行くぞ」

『ありがとう！リュウダモン』

兄さんとアグモンのやり取りを見てみると、服を引っ張られたのでそちらを向くとリュウダモンおり話しかけてくる。その内容に嬉しくなった僕はリュウダモンの首に抱き着きながらお礼を言った。

「じゃあ、自分の荷物を確認してくれ」

リュウダモンと話しているうちに話がまとまったのか丈さんがみんなに声をかける。

僕は手早く荷物を確認を済ませる。

「よし！出発だー！！」

『おう！』

兄さんの掛け声に全員が声を揃えて答える。

僕は兄さんの少し後ろをリュウダモンと一緒に歩き出した。

SIDE:OUT

第二話（後書き）

単眼鏡については完全に捏造です。

原作では特に触れてなかったと思ったので利用させてもらいました。

最後のリュウダモンとのやり取りは私が見たかったので書きました。
ごめんなさい。

睦稀とリュウダモンの性格に統一性がない気がしますが、できれば
気にしないでください。

次は原作第三話ですが、遅くなります。

明日が何曜日か考えればお分かりだと思います。

この小説を読んで頂いている方達の為にも頑張ります。

第三話（前書き）

原作第三話。

思った以上に時間が掛かってしまいました。
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

第三話

SIDE：睦稀^{むつき}

砂浜を離れた僕たちは海を見渡せる崖の上に立っている。
崖の淵に立った兄さんは何かを考えているようだ。

「アグモン」

「なに？太一」

「お前なんでまたグレイモンからアグモンに戻っちゃったんだよ」

「それは……………」

「それは？」

「ボクにもよく解らないや」

疑問の答えをアグモンに求めた兄さんはアグモンの拍子抜けした答えにズッコケて海に落ちそうになりそれを慌ててアグモンが引つ張って防ぐ。

そんな様子を笑っていると突然背後から大きな鳴き声が聞こえてきた。

『！？』

「なに！？」

慌てて後ろを振り返るとモノクロモンが後ろの森から姿を現すところだった。

「なんだアレは？」

「モノクロモンや、でもおとなしいデジモンやさかい心配せんでもいいやろ」

「そんなこと言っただって、こっちに向かって来るぞ」

兄さんの言う通りモノクロモンは威嚇するように声を上げながらこちらに近づいてくる。

目の前に迫ったモノクロモンは大きな鳴き声をあげ威嚇するがその目はこちらを見てはいない。

それに気づいたのか兄さんが後ろを振り返る。

僕たちも釣られる様にして後ろを振り返ると、そこにはもう1匹のモノクロモンがいた。

「もう1匹いる」

「まずい、挟み撃ちにされた」

「みんな逃げろ！」

走り出した兄さんに続き逃げ出した僕たちはひとまず近くにあった大きな岩の陰に隠れた。

岩陰から様子を伺うと2匹にモノクロモンが鳴き声をあげながらぶつかっていた。

「あいつら仲間同士で戦ってる」

「なぜだ？」

「縄張り争いでっしやるな」

兄さんと光子郎さんの疑問にテントモンが落ち着いた様子で答える。

「今のうちに行きましょう」

「待つてパルモン、自分だけ先に逃げないでよ」

逃げ出したパルモンを追いかけたミミさんに続いて僕達も背後の森の中を走る。

「タケル！」

走っているとすぐ後ろからパタモンの声が聞こえたので足を止め振り返るとタケル君が転んでおりヤマトさんが駆け寄っているところだった。

「大丈夫か？」

「平気だよなタケル！」

「うん！」

ヤマトさんが心配そうに声をかけていると、前を走っていた兄さんが振り向きながらタケル君に声をかける。

するとタケル君は力強く返事をするとう立ち上がり再び走りだす。

「ムツキ君、行こう」

『うん』

そんな様子を立ち止まって見ていた僕は駆け寄ってきたタケル君に促され一緒に走りだした。

その後僕達は、モノクロモン達から十分距離を取ったのを確認すると走るのをやめ歩き出す。

歩き始めて少しすると空の色が変わり夕方のようになる。

タケル君と一緒に歩いていると、さっきの出来事を思い出したので声をかける。

『さっき転んじやつたけど大丈夫だった？』

「うん、全然平気だよ」

『タケル君で強いんだね…… あっ膝、ケガしてるよ』

本当に平気そうにしているタケル君に感心していると膝をケガしていることに気が付いた。

「本当だ」

『待ってて、今絆創膏を貼ってあげるからそこに座って』

ケガに気づいても以外に平気そうにしているタケル君の様子に、改めて感心しながら鞆から絆創膏を取り出し膝に貼ってあげる。

「ありがとう」

『どういたしまして』

笑顔でお礼を言うてくるタケル君にこちらも笑顔で返していると、突然テントモンが大きな声をあげた。

「あー！飲み水確保や、湖、湖でっせあそこでキャンプしまへんか？」

「あたし賛成、もうこれ以上歩けない」

「おいら泳ぐー」

「ゴマモン、待て！」

テントモンの報告にミミさん賛成しながら座り込み、丈さんは駆け出したゴマモンの尻尾を掴み必死に止めている。

「俺も今日はここまでにしたほうが良いと思う」

「みんな疲れて腹も減ってきたしな」

ヤマトさんがそう言いこちらを見ると、兄さんもみんなを見回し最後に僕のほうを見てヤマトさんに賛成する。

「よし、今夜はあそこでキャンプだ」

最後に丈さんがまとめる形になり、丈さんの言葉を合図に移動を始める。

湖まではたいした距離は無く、夜になる前に到着できた。

「うわゝ、大きな湖」

ピヨモンの言う通り湖はそこそこ大きかったが、僕はそれ以上に湖の真ん中に立つ鉄塔と電柱、そして島の上に停まっている路面電車に目がいった。

「ここならキャンプに最適ね」

「ねえ、キャンプってつまり野宿って事？」

「ま、そうなるな」

「うそ」

空さんの言葉を聞いたミミさんが兄さんに不安そうに聞くと、兄さんが平然と答えミミさんは嫌そうに声をあげる。

そんな2人の様子を見てみると、突然小島の上にあった路面電車のライトが点灯した。

「ライトが点いた」

「路面電車だ」

「どうしてこんな所に」

兄さんが驚いた様子の声を聞き初めて路面電車に気づいたタケル君と光子郎さんが声をあげる。

「ねえ、誰か中に居るんじゃない？」

「行ってみようぜ」

空さんの言葉に真っ先に反応した兄さんがアグモンと一緒に走り出し皆も慌てて後に続く。

「誰も居ない…」

「本当だ！」

真っ先にたどり着いた兄さんが中を確認するが中はもぬけの殻でそのことに空さんも驚いていた。

「まだ新しいですね」

「あはっ、ちゃんとクッション効いてる」

「しっかしわかんねえな、海辺の電話といいどうなってんだ？」

「まさか突然動き出すとか…」

『線路がありませんし大丈夫ですよ……たぶん』

「この中なら眠れそうね」

「その前にそろそろ飯にしまへんか」

みんな電車に夢中になっていたがテントモンの言葉でキャンプのことを思い出しそれぞれの役割分担を決め動き出した。

僕は果物担当になりリュウダモン、ガブモン、ピヨモン、パタモン

と一緒に行動することになった。

~~~~~

湖から少し離れた森の中で果物を見つけた僕らはパタモンが「僕に任せて」と言うのでここは任せることにし様子を見ている。

「エアースョット」

「うわ！痛」

「大丈夫？ガブモン」

パタモンの必殺技が命中した果物はガブモンの上に落下し角に突き刺さった。  
エアースョット

僕は慌ててガブモンに駆け寄ると角から果物を抜き頭を優しく撫でる。

「そんな技を使って果物を取ろうとするからよ」

そんな様子を笑って見ていたピヨモンが飛びながら言うところ近くにあった果物を嘴で掴み取ろうとするが、予想以上に頑丈でなかなか取ることができないでいる。

「そんなんじゃないや駄目だよ、まあ見てな」

今度はリュウダモンが自信たっぷりと言うと近くの果物が生っ

る木に近づく。

『?……っ！待ってリュウダ「居合い刃！」……うわぁ！』

リュウダモンが何をしようとしているのか気づき慌てて止めようとするが間に合わず、リュウダモンの必殺技居合い刃を受けた木は根元から切断され僕らの近くに倒れてきた。

『危ないだろ！大体、少しの果物を取るのにいちいち木を切ってたから効率が悪いだろ』

「うっ、悪かったよ」

『次からは気をつけてよね』

リュウダモンを注意するが余りにも落ち込むのでこれ以上怒る気になれなかった。

その後はとくに問題も無く目標数の果物を集めることができた。果物を抱えて湖畔に戻ると他のみんなは戻っており焚き火が燃え周りを魚が囲っていた。

『兄さん戻ったよ』

「遅かったな、何かあったか？」

少し心配した様子で聞いてくる兄さんに苦笑しながら曖昧に答えて、集めた果物をデジモンたちと協力してみんなに配る。

果物を配り終わると兄さんの隣に座り魚が焼けるのを待った。

~~~~~  
~~~~~

魚が焼けるとみんなで火を囲み食事を始める。

僕は兄さんの横に座り先ほどデジモンたちと採ってきた果物を食べている。

「タケル」

「なに？お兄ちゃん」

「骨取ってやろうか」

しばらくしてヤマトさんがタケル君の世話を焼き始めると隣に居た兄さんがタケル君に近寄っていく。

「頭からガブツといけ」

『そうそう、結構美味しいよ』

「うん」

兄さんに続いて声をかけながら手元の魚を実際に食べて見せるとタケル君は頷いて魚を食べ始める。

その様子を見届けた兄さんは離れたところで水を汲んでいる空さんとところに歩いて行った。

兄さんを見送ったあとタケル君の横に移動する。

『魚も美味しいけど果物も美味しいよ』

「本当だ、美味しい」

『良かったねパタモン、リュウダモン、頑張って採った甲斐があったね』

「ありがとうパタモン、リュウダモン」

「「どういたしまして」」

その後もたわいない話をしているとタケル君の横に居たパタモンが大きな欠伸をして地面に伏せる。

「眠いの？パタモン」

『リュウダモンも眠い？』

「ちょっと眠いかな」

「ふわぁ、そろそろ寝ようぜ」

僕達のやり取りを見ていた兄さんが大きな欠伸をしてみんなに提案する。

「交代で見張りをしたほうが良くないですか？」

「そうだな順番を決めよう」

「女の子はやらなくてもいいだろ」

「タケルもだ」

少し離れたところで兄さん達が見張りの話をしていると、タケル君の隣にいたヤマトさんが立ち上がり兄さん達に声をかける。

「僕平気だよ」

「いいからお前はゆっくり休め」

「睦稀はどうする」

『僕は兄さんと一緒なら』

ヤマトさんの言葉にタケル君が反発していると兄さんが話しかけてきたので素直に答える。

「でも寝るって言うってもお布団とか無いのよ」

「ガブモン、毛布代わりにその毛皮貸してくれよ。俺すっごく気に入ってたんだよなあ、ガブモンのさ、あの毛皮の下ってどうなってるの？」

「うわあゝ、それだけは」

ミニさんが布団の心配をしていると兄さんがふざけた様子でガブモンに近づき毛皮の端を掴み引っ張る。

「よせ！」

「なにするんだよ！」

ガブモンの嫌がる様子をみたヤマトさんは駆け寄ると兄さん突き飛ばす。

隣に居るタケル君は驚いて2人を見ている。

「嫌がつてるだろ！」

「突き飛ばすことないじゃないか！」

「や、やめて2人共」

『そうだよ』

「ふんっ！」

喧嘩する2人をタケル君と一緒に止めるため声をかけると2人は同時のそっぽを向き合う。

「え〜と、じゃあ最初の見張り番は」

「俺がやる！」

「次は俺だ！」

「わかった、光子郎がその次、最後は僕だ。さあみんな路面電車の中で寝るんだ」

最後は丈さんがまとめる形になり、見張りの順番を決めた僕達は路面電車に移動を始めた。

~~~~~  
~~~~~

みんなが路面電車で眠る中、僕は兄さんの隣で焚き火に当たっている。

隣で地面に伏せてうとうとしているリュウダモンに寄りかかって火を見つめていると兄さんが大きな欠伸をした。

「眠ったら見張りしてる意味ないよ」

「あゝ、眠たいな顔でも洗ってくるか」

眠そうな兄さんは立ち上がり伸びをすると水辺に歩いて行く。

『アグモンは眠くないの？』

「全然眠くないよ」

『偉いなあ、リュウダモンにも見習わせたいよ』

アグモンと話しながら隣で完全に眠ってしまったリュウダモンを見る。

「ムツキは大丈夫？寝てても良いんだよ」

『ありがとうアグモン、でも大丈夫だよ』

こちらを覗き込むようにして心配そうに聞いてくるアグモンに御礼

を言う。

その後アグモンと話していると少しして兄さんが帰ってきた。しばらく全員が無言でいると湖畔の方からハーモニカの音色が聞こえその音色に聞き入る。

心地いい音色に少しずつ瞼が重くなり始め視界が狭くなるなか兄さんが枝を持って焚き火をつつくのが見えた。

「うわっ！焚き火が弾けた」

「『！？』」

焚き火の弾ける音と兄さんの驚いた声で一気に目が覚める。リユダモンも弾かれた様に起き上がり寝ぼけた様子で辺りを見回している。

「うわぁ」

「な、なんだ」

焚き火の驚きが落ち着いてくると、次は足元の揺れが襲ってくる。

『兄さん、あそこを見て！』

湖に渦潮が出現しているのに気づき兄さんに声をかける。

2人と2匹が注目する中、渦潮が盛り上がり弾けると中からシードラモンが姿を現す。

突然現れたシードラモンに驚きの余り全員声を出すことができない。しばしこちらを見ていたシードラモンが向きを変えると湖の沖のほうに泳ぎだすと島が揺れ動き出す。

「島が浮いてる」

「動いてるんだ!」

突然動き出した島に驚いていると光子郎さんとテントモンが近づいてくる。

「なんだかこの島をシードラモンが引っ張ってるみたいだ」

「そんなアホな、シードラモンは殺気を感じんかぎり襲ってきいしませんで」

光子郎さんとテントモンの焦った声が聞こえてくるなか、シードラモンが動きを止めるのに合わせて島の動きも止まる。

「あ、止まった」

「あんさんなんか悪いことしよりましたんかいや」

「『『』なにもしてない…うわっ!』」「」

地面に降りたテントモンの言葉を否定しようとした瞬間テントモンの足元から何かが飛び出してくる。

「あ!あの葉っぱみたいなヤツはあいつの尻尾だったのか」

「やっぱりあんさんらのせいや」

『僕はあんな尻尾知らないよ』

地面から飛び出してきたのはシードラモンの尻尾で、それを見た兄さんが声をあげる。

それを聞いたテントモンの言葉を僕は否定する。

『うわっ』

そんなやり取りをしていると突然地面が揺れ後ろに倒れてしまう。どうやらシードラモンが尻尾で島を叩いたらしく、横では兄さんやアグモンも同じように転んでいる。

次にシードラモンは泣き声をあげると湖の中に潜っていく。

しばしの静寂の後、下からの突き上げる様な衝撃が襲い島が再び動き出す。

「うわぁ島が流されてく」

「あたし船酔いしそう」

後ろから丈さんとミミさんの声が聞こえてくる。

島から落ちないように伏せていると湖の中央にある鉄塔にぶつかり島が止まる。

「やっと止まった」

「でもこれじゃあどこにも逃げられませんよ」

『シードラモンが居るかぎり泳いで岸に行くわけにもいかないし』

やっと島が止まり逃げ出したいが島は湖の真ん中にあるため周りを水に囲まれている。

逃げ出す隙を与えないように再びシードラモンが姿を現す。

「襲ってくるぞ」

「みんな行くよ!」

アグモンの言葉を合図にデジモン達がシードラモンに向かって行く。

「マジカルファイアー!」

「エアースョット!」

ピヨモンとパタモンが必殺技を放ち、それがシードラモンの顔に当たるがダメージを与えられない。

「ポイズンアイビー!」

パルモンがシードラモンに向け蔓を伸ばすが届かない。

その後のテントモンとアグモンの攻撃も効果がなく皆が焦りだす。

「アグモン進化だ」

「さっきからやろうとしてるけどできないんだ」

「なんでだよ」

「だから僕にもわかんないってば」

「肝心なときに役に立たない奴だな」

『兄さん!今はアグモンを責めても仕方ないよ』

「だけどここのままじゃ…」

進化できないアグモンに焦って怒り出す兄さんを宥めるが問題が解決したわけではない。

どうすることもできずシードラモンが迫るなか背後から声が聞こえてくる。

「おーい、タケルー」

その声に真っ先に反応したタケル君が声のした方に走り出したので後を追いかける。

島の淵にたどり着くとこちらに向かって泳いでくるヤマトさんの姿が見えた。

「お、お兄ちゃん、お兄ちゃん！……うわっ」

「タケル！」

『タケル君！』

タケル君がヤマトさん呼びもつと近づこうとして湖に落ちてしまふ。

突然のことに名前を呼ぶことしかできなかったが一緒に着いてきたゴマモンが湖に飛び込んでいった。

少ししてタケル君を背に乗せたゴマモンが水面に浮上してきたのを見て安堵のため息を漏らす。

「いいぞゴマモン」

「ヤマト早く！」

「ヤマト、シードラモンやー！」

後ろのほうから丈さんのゴマモンを褒める声と一緒に、兄さんとデントモンの慌てた様子でヤマトさんに向かって叫ぶ声が聞こえてくる。

「ゴマモン頼むぞ……おい！シードラモンこっちだ」

兄さん達の声を聞いたヤマトさんはタケル君をゴマモンに任せ島に向かわせると、シードラモンに向かって叫び島とは反対方向に泳ぎだす。

『タケル君掴まって』

島にたどり着いたゴマモンの背中に乗っているタケル君が島に上がるのを手伝っていると湖のほうからガブモンの声とシードラモンの鳴き声が聞こえてくる。

どうやらヤマトさんの後を追いながらシードラモンに向けて必殺技プチファイアーを放ったようだ。

「うわぁ！」

しかしガブモンの必殺技プチファイアーは一瞬シードラモンを怯ませることができたがダメージにはならず、水中からの尻尾を使った攻撃でガブモンは吹き飛ばされてしまう。

「ガブモン！……うわっ！」

ガブモンに気を取られた隙にヤマトさんはシードラモンの尻尾によつて水中に引きずり込まれてしまう。

「お兄ちゃん！僕のせいだ、僕を助けようとしてお兄ちゃんは」

「ヤマトー！」

ヤマトさんの所に行こうとするタケル君を必死に抑えていると兄さんがヤマトさんの名前を叫ぶ。

「うわぁー！」

水中からヤマトさんが姿を現すと、その体にはシードラモンの尻尾が巻きついておりヤマトさんは苦しそうな声をあげる。

「まずい、まずいでっせ、シードラモンは一度つかんだ相手は息絶えるまで締め付けるんや」

「お兄ちゃん！」

テントモンの話を聞きタケル君が必死に呼びかける。

「パタモンお願いお兄ちゃんを助けて」

「ぼ、僕の力じゃシードラモンには通用しない、ガブモン、君なら」

「無理だよ…俺にそんな力は」

タケル君はデジモン達に助けを求めるがパタモンとガブモンは俯いてしまう。

「うわぁー!!」

「お兄ちゃん!」

「ヤマトー!……もうヤマトのハーモニカが聴けないなんて、あの優しい音色が聴けないなんて!」

さらに強くなる締め付けにヤマトさんの叫び声が聞こえてくる。

ヤマトさんの声を聞いたガブモンが何かを決意したように声をあげるとヤマトさんの腰につけたデジヴァイスが光を放つ。

「ガブモン」

ヤマトさんが苦しそうにガブモンの名前を呼んだ瞬間ガブモンを光が包んだ。

「ガブモン進化!……ガルルモン!」

光が収まるとそこには大きな狼のようなデジモンが立っていた。

ガルルモンは駆け出しジャンプするとヤマトさんを捕らえていた尻尾にすれ違いざまに攻撃を加える。

ガルルモンのもよんで開放されたヤマトさんは湖に落下した後こちらに向かって泳いでくる。

ヤマトさんを助けたガルルモンはそのままシードラモンの胴体に噛み付くがすぐにシードラモンの尻尾によって湖に叩き落とされてしまふ。

「ハアハアハア」

「お兄ちゃん大丈夫!？」

何とか島にたどり着いたヤマトさんは息を荒げてうつ伏せに倒れる。そこにタケル君が駆け寄り心配そうに声をかける。

「俺よりガブモンが」

なんとか呼吸を整え上半身を起こしたヤマトさんは心配そうに湖を見つめる。

その後水面に浮上したガルルモンは攻撃をかわしていくがシードラアイスアローモンの必殺技に捕らえられ水面ごと氷付けにされていく。

「あ、あれはシードラモンの必殺技、アイスアローや」

テントモンの焦った様子に皆が心配そうにガルルモンを見つめるが、ガルルモンはダメージを受けた様子は無く氷を砕き動き出す。

「フォックスファイアー!」

ガルルモンの口から放たれた青い炎はアイスアローを相殺しながらシードラモンに迫る。

そしてついにガルルモンの必殺技がシードラモンを捕らえると大きな爆発が起こりシードラモンは水面に叩きつけられる様に倒れ呻き声をあげながら水中に沈んでいった。

ガルルモンの勝利に隣の兄さんと喜び合っているとガルルモンから退化したガブモンが島に上がってきた。

「ガブモン」

「なんとか無事だったみたいだね」

「なんだよ進化できるなら始めからしろよ」

最初に出迎えたヤマトさんがガブモンと話しているとタケル君がガブモンに駆け寄っていった。

「ガブモン、ありがとう助けてくれて」

「いや、そんな……」

タケル君のお礼にガブモンは照れた様子で顔を逸らしてしまう。

「それにお兄ちゃんも、本当にありがとう」

「べ、別に……」

今度はヤマトさんに向かってタケル君がお礼を言つとヤマトさんも照れた様子で視線を上に逸らしてしまう。

「照れ屋なんだから」

「それはお前だろ」

そんなヤマトさんの様子を見たガブモンがからかう様に言つとヤマトさんが誤魔化すように言い返す。

そんな2人の様子を皆で笑いながら見ていると丈さんが不安そうに声をあげる。

「でもどうやって岸に戻るんだ？」

「おいらに任せて……マーチングフィッシーズ」

ゴマモンは湖に飛び込むとすぐに必殺技を使い呼び寄せた魚と共に島を押し始める。

ゴマモンのおかげで無事岸にたどり着いた僕達は島を離れ湖畔で広場のように視界の開けた場所に移動した。

「でもどうして今度はガブモンだけが進化できたんでしょうね？」

「もしかしてヤマト君がピンチだったから」

寝ているリュウダモンに寄りかかりうとうとしていると近くに居た光子郎さんと空さんがガブモンの進化のことで話し始めた。

それを聞いていた兄さんはシェルモンのときを思い出しているようだ。

「この前アグモンが進化したときも俺が危機一髪の時だった」

「彼らが進化するのは僕達に大きな危機が迫ったときですか？」

「そうよきつと…？ミニちゃん？」

話し合いが結論に達したとき空さんの肩にミニさんがもたれかかってきた。

「もうここで寝る」

ミニさんはそうつぶやくと空さんの肩からはなれ地面に直接横になった。

「たった1日ここで過ごただけなのに遅くなったね」

「そのうち僕みたいながっちりした体になるねきっと」

「私みたいな翼も生えるかもね」

「それは嫌……」

空さんの言葉にアゲモンとピヨモンが楽しそうに話すとそれを聞いたミミさんは小さく呟くと完全に眠ってしまった。

ミミさんに釣られるようにして皆が思い思いの体制で眠りだす。僕もリユウダモンに寄りかかったまま何処からか聞こえてきたヤマトさんのハーモニカの音を聞きながら深い眠りに落ちていった。

SIDE:OUT

### 第三話（後書き）

次回は原作第四話です。

できるかぎり早く投稿できるよう頑張ります。

活動報告を書きました。

デビモン編の今後の展開について書いてあるので気が向いたら呼んでみてください。

## 第四話（前書き）

原作第四話。

遅くなって申し訳ありません。

相変わらず主人公が活躍しません但至少でも楽しんで頂けたら幸いです。

## 第四話

SIDE：睦稀<sup>むつき</sup>

シードラモンと戦った湖を離れた僕たちは再び森の中を移動している。

皆が無言で歩くなか前の方を歩いていた空さんが立ち止まり空を見上げる。

同じように立ち止まり空を見上げていると不思議な音が聞こえてきた。

「何の音だ？」

兄さんが不思議そうに呟いた瞬間、木々の隙間から見える空を黒くて円い物体が通過していった。

「歯車みたいだったな」

「歯車型の隕石だったりして」

「なんにしても良い感じのするもんじゃないな」

「色も真っ黒で不気味だったよ」

ヤマトさんとミミさんの言葉に対する丈さんの言葉に同意の意味をこめて見た物の感想を言う。

皆が沈黙するなか前にいたタケル君が段差を登ろうとして足をかけていた木の根が突然折れバランスを崩して地面に転んでしまう。

慌てて駆け寄ろうとすると僕とヤマトさんより先に反応した兄さんがタケル君の脇に手を入れて持ち上げる。

「大丈夫か？タケル」

「痛ったあ……けど大丈夫、我慢する」

「我慢しないでいいのよ、痛かったら痛いって言っても良いんだから」

「うん、本当はちょっとだけ痛い」

兄さんが心配そうに聞くと我慢して大丈夫だと答えていたが空さんの言葉に少し顔を痛そうに歪めて答える。

そんな様子を微笑ましく見ているとタケル君を降ろした兄さんが手を差し伸べてきた。

「睦稀も気をつけろよ」

「ありがとう、兄さん」

お礼を言いながらその手を掴み段差を登る。

「さあ、行きましょう」

「そうだ、泣きごと言っただって始まらないからな」

僕が段差を登り終えるのを待つて空さんが皆に声をかけるとそれを聞いた兄さんが難しそうな顔をする。

「そうは言っても、どっちに行ったらいいかなんて誰にもわからないし」

「それは確かにそうだけど…」

兄さんの言葉を聞いた空さんは少し悩んだ様子で答える。

「私は空が居てくれればそれで安心」

「そんな100%安心されちゃっても困るんだけどな、責任とれないよ」

嬉しそうに足に擦り寄るピヨモンを見下ろしながら空さんは困ったように呟く。

するとその言葉に反応したピヨモンが不思議そうに空さんを見上げる。

「ひゃくぱー？」

「いい、いい、気にしなくて」

「せきにんとれ？」

「いいってば、気にしないで」

ピヨモンの質問を疲れた様子であしらう空さん。

そんな様子を眺めていると兄さん達が空さんを置いて歩き出したので慌てて後に続く。

「私、空の喋ってることいっぱい知りたい、教えて、ねえ」

「そんなの知らなくていいよ」

「なにじゃれてるんだよ」

後ろで続くやり取りを聞いているとヤマトさんが後ろを振り返り空さんに声をかける。

「余裕だな」

「好きでじゃれてるんじゃないわよ」

ヤマトさんに続き兄さんが声をかけると空さんは少し怒った様子で歩き始めピヨモンが嬉しそうにそれに続く。

「ピヨモンは人懐っこいデジモンなんや」

「なるほど、デジモンによって性格がそれぞれ違うんですね」

後ろを歩くテントモンと光子郎さんの話を聞いていると手を繋いだ空さんとピヨモンが追いついてくる。

「そろそろ、そろそろ」

「こんな甘ったれのデジモンとうまくやっていけるのかしら」

手を繋ぎ嬉しそうに空さんの名前を呼ぶピヨモンに対して空さんは不安そうだった。

その後タケル君やリュウダモンと話しながら歩いていると先頭を歩いていた兄さんとヤマトさんが立ち止まり辺りを見回す。

「あ！森から抜けるぞ」

ヤマトさんの視線の先には森の出口があり、そこから先は荒野になっ  
ているようだ。

その場で少し話し合い電柱が無数に立つ不思議な荒野を進むことにな  
った。

「これって、テレビで見たアフリカのサバンナって所に似てる」

「えーじゃあ、ライオンとかキリンとか出てきちゃうのか？」

「そんな普通のヤツだったらまだましだけだな」

「ちょっと怖いけどライオンとか見てみたいな」

先頭を歩く兄さんの後ろをタケル君と一緒に歩いていると、後ろの  
方から光子郎さんの声が聞こえそれに兄さんが反応する。

兄さんの言葉にヤマトさんが応え、僕も思ったことを口にするがデ  
ジモン達によって否定されてしまう。

「ここにはそんな動物いないよ」

「その通り、ここにはデジモンしかいてまへん」

「デジモンしかないのか…」

ガブモンとテントモンの言葉を聞いたヤマトさんは少し残念そうに  
呟いた。

その後、話が無数に立つ電柱に移るなかちょっと気になることがあ

つたので話の邪魔にならないようにリュウダモンにこっそりと話しかける

「ライオンやキリンみたいなデジモンならいるんじゃない？」

「らいおんや、きりんって言う動物は見たこと無いからわからないけど、いるんじゃない？」

ライオンならレオモンがいるけど、キリンのデジモンを見た覚えが無かったので聞いてみたがキリン自体を知らないようだった。

リュウダモンの答えに少し残念に思いながら皆の会話に耳を傾けると、人間が居るか居ないかの話になっているようだ。

「いやちがう！絶対、絶対、人間がいるんだって！」

丈さんの力説にみんな立ち止まり、丈さんの前を歩いていたミミさんと光子郎さん以外の6人が振り返る。

皆があきれた様子で丈さんを見るなか、ミミさんだけが笑顔で丈さんに後ろから近づく。

「ここはいつたいどこでしょう……じゃーん」

みんながミミさんに注目すると、ミミさんは掛け声とともに方位磁石を取り出してみせる。

ミミさんは方角を確かめる為に地面に方位磁石を近づける。

みんなが覗き込み方位磁石の動きを見守っていると、一瞬動きが止まりそうになったがすぐに動き出し、ついには凄い速さで回転を始めた。

「いやーん、なにこれ」

「砂みたいに見えるけど……これよく見たら鉄の粉だ。磁石にくっつきますよ」

ミニさんがおかしくなった方位磁石を見て呟くと、光子郎さんが地面の砂を持ち上げ皆に磁石がおかしくなった原因を説明してくれた。

「やっぱり私達、とんでもない所に来ちゃったのかしら」

光子郎さんの言葉に空さんが不安そうに空を見上げながら呟く。

「それにしても暑いですね。早く水を確保した方がいいんじゃないですか？」

「うーん、確かにな」

雲ひとつ無い空にある太陽を見上げながら光子郎さんが提案すると、兄さんも同じように空を見上げながら唸りながら答える。

みんなが沈黙するなか、方位磁石を見続けていたミニさんが勢い良く立上り空を見上げる。

「ここはいったいどこなのー！」

ミニさんの叫び声が無限に続く荒野に響き渡った。

ミニさんが落ち着くのを待つて移動を再開するが、日差しは弱まるどころかさらに強くなったように感じられた。

「あゝ、暑い」

「やっぱり森の中に居たほうが良かったんだよ」

暑さに耐えかねた兄さんの呻きに丈さんが不安そうに言葉を漏らす。

「リュウダモン大丈夫？」

「なんとかね、ムツキこそ無理するなよ」

「こう見えても我慢強い方だからね。まだ大丈夫だよ」

鎧を着けているリュウダモンが心配で声を掛けたけど、まだ大丈夫そうだった。

心配そうに声をかけてきたリュウダモンに笑顔で答えていると後ろから空さんの怒鳴り声が聞こえてきた。

「ああもう！いい加減にしてよ。私はね、今のどが渴いてて疲れてるし、歩いてて疲れてるし、無邪気にじゃれつかないの！余計に疲れるわ！」

みんなが立ち止まり空さんとピヨモンに注目していると、怒鳴られたピヨモンは落ち込んだように俯いてしまう。

「空疲れてるんだ、ごめん。ピヨモンおとなしくする」

「うーん、わかったわかった一緒に歩こう」

「私嬉しい。空、大好き」

謝ってくるピヨモンに空さんが声をかけるとピヨモンは急に元気になり空さんに駆け寄り嬉しそうに足に擦り寄った。

そんな様子を見届けてから兄さんに近寄り声をかける。

「兄さん、単眼鏡使ってみたら？何か見えるかもよ」

「そうだな、試してみるか」

そう言う兄さんは少し前に進み出て単眼鏡を覗き込む。

「ん？……あ！村だ！」

「ほらほら村だって、やっぱり人間が居るんだよ」

兄さんが村を見つけて声をあげると皆が驚くなか、丈さんは嬉しそうに人間の存在を主張する。

「なにせよ行ってみる価値はありそうですね」

「のど渴いたねパルモン」

「お腹すいたよ」

「すいたすいた」

「よし！あの村に行こう」

光子郎さんの言葉をきっかけに皆が思いを口にし兄さんの掛け声に応え歩き出した。

「なあムツキ、もしかして村があること知ってたのか？」

「ぐ、偶然だよ、偶然」

「ふん」

（ごめんねリュウダモン）

歩き始めて少ししてから投げかけられたリュウダモンの質問に動揺してしまい、応え方がぎこちなくなってしまうたがリュウダモンはそれ以上追求せずにひとまず納得してくれたようだった。

そんなリュウダモンの様子に少し罪悪感を感じたが、心の中で謝るだけにとどめて歩き続ける。

~~~~~

村には思ったより早く到着することができた。

その理由は、遠くにあり小さく見えると思っていた村は藁のような植物でできた小さな家が立ち並ぶ村だったからだ。

「ピヨコモンの村だったのか」

みんなが啞然とするなか兄さんが次々と姿を現すピヨコモンたちを見て呟く。

その場で少しピヨコモンと話した後、いったん解散しそれぞれ村を見て回るようになった。

「そろ、ピヨコモンたちがみんなにご馳走してくれるって」

リュウダモンと村を見て回っているとピヨモンの声が聞こえてきた。

「本当！？」

「ヤッホー、腹いっぱい食っちゃうぜ」

「ピヨコモンさま大感謝」

「私お腹ぺこぺこ」

「いったいどんなご馳走なんでしょうね？」

「噴水がある。水だ、水だ」

ピヨモンの言葉にみんなが喜びの声をあげるなかタケル君が突然声をあげながら走り出した。
みんながタケル君を追いかけた先にあったのは綺麗な水が噴き出る噴水だった。

「この辺りはみんな、みはらし山に水源があるの。とっても美味しいんだ」

「この水があ有名なみはらし山のおいしい水ですわ」

「みはらし山？」

ピヨコモンの説明にテントモンが納得した様子で応えるのを聞いたタケル君がテントモンに質問すると、ピヨコモンたちが一斉に声をあげて同じほうを向いた。

ピヨコモンたちに視線の先には4段の鏡餅みたいな不思議な形をした山が聳え立っていた。

しばらくみはらし山を見ていたみんなが再び噴水を見た瞬間、突然噴水の水が止まり火柱が立ち上がった。

突然のことに噴水の近くにいた兄さんと空さんは尻餅をついてしまった。

「そんな、のど渴いてたのに」

「まだお水飲んでない」

立ち上がる火柱を見てタケル君とミミさんが非難の声をあげる。

「どういうことだ？」

「いったいどうして…」

座ったまま兄さんが呆然としたようすで呟くが、ピヨコモンにも何が起こっているのかわからないようだ。

「大丈夫、あつちに池があるから」

「行ってみよう」

一匹のピヨコモンがそう言い駆け出すと、兄さんもみんなを促し後に続いて走りだした。

ピヨコモンが池だと言う場所にたどり着くと、そこに水は無く後ろ半分が埋まった巨大な船が真ん中にあるクレーターのような穴があるだけだった。

その後、村にある井戸も確かめたが水どころか火柱があがる始末だった。

「実は…さつき、みはらし山に何かがおちるの見た」

突然の出来事にみんなが呆然とするなか一匹のピヨコモンが思い出したように声をあげる。

「ああ、俺達が見たあれか」

「黒い歯車ですね」

ピヨコモンの言葉に思い出したようにヤマトさんと光子郎さんが応える。

「でも、みはらし山に歯車が落ちたからって、どうして…」

そんな空さんの疑問にピヨコモンが答える。

「この辺りは全てみはらし山の泉が水源なの、だからみはらし山に何かあったら水は全部干上がっちゃう」

「でもみはらし山にはメラモンがいるの」

「みはらし山はメラモンが守ってくれてるはずなの」

ピヨコモンが不安そうにそう言うと兄さんが単眼鏡を手に持って前に出る。

「みはらし山だな、見てみようぜ」

そう言って兄さんは単眼鏡を覗き込む。

少しして山頂に炎が立ち上がり小さな光の点が山を降りるのが見え

ると同時に兄さんが驚きの声をあげる。

「なんだあれ!？」

「メラモンが山から降りてくる」

「メラモンが山を降りてきた」

「いつものメラモンじゃない」

兄さんの疑問に答えるようにピョコモンたちが次々声をあげる。

「メラモン……あれが」

単眼鏡を下ろした兄さんはさっき見たものを思い出しているようだった。

ピョコモンたちが慌てた様子で飛び跳ねるなか遠くから叫び声のよ
うな音が聞こえてきた。

「何か言ってる」

「ああ」

空さんの呆然とした様子の呟きに兄さんも同じような様子で応える。
山を降りたメラモンは麓に広がる森の中を疾走し、通過した所では
火の手が上がり木々を燃やしている。

「みんな、逃げろー!」

メラモンが森から荒野に出たのを確認した兄さんはみんなに聞こえ

るように叫ぶと池の方に走り出した。

僕もタケル君や光子郎さんと一緒にピヨコモンたちを誘導しながら兄さんを追う。

「ここに隠れるんだ」

「早く」

干上がった池にたどり着くと船底に空いた穴の両脇に立ちピヨコモンたちを船の中に誘導する兄さんと空さんとがいた。

「睦稀、タケル早くしろ」

兄さんに促され船の中に入ったところで後ろから空さんと兄さんの慌てた声が聞こえてきた。

「ピヨモン！」

「空、どうした」

タケル君を先に行かせて光子郎さんと一緒に兄さんの所に戻ると、空さんが走って船から離れて行くところだった。

「ピヨモン後ろ！」

空さんの声に慌ててピヨモンの方を見ると、ピヨモンの背後にメラモンが迫っていた。

ピヨモンが空さんの声に後ろを振り返るとメラモンが腕を振りピヨモンをなぎ払う。

「ピヨモン！」

空さんは声をあげ走り出すと崖を転がるようにして落ちてきたピヨモンをダイビングキャッチする。

起き上がった空さんとピヨモンは何かを話しているようだが、距離があつたので聞こえなかった。

空さんが立ち上がると腕の中にいたピヨモンが慌て出し腕の中から飛び出しメラモンに向かって行く。

ピヨモンが向かう先、メラモンを見ると右手に火の玉を生み出し空さんを攻撃しようとしているところだった。

「マジカルファイアー！」

メラモンがいるところまで飛び上がったピヨモンが必殺技を放つ。
マジカルファイアー

必殺技を胸に受けたメラモンが苦しそうに胸を抑えると、ピヨモンは連続で必殺技を放ち畳み掛ける。
マジカルファイアー

「マジカルファイアー、マジカルファイアー！」

連続で放たれた必殺技が当たるがさっきまで苦しんでいたのが嘘のようにメラモンは平然としている。

「ピヨモンだけじゃ太刀打ちできない」

そんな様子を見ていた兄さんが焦ったように言うとその横を、アグモン、テントモン、パタモン、ガブモン、リュウダモンの5匹が駆け抜けて行く。

「よし！」

メラモンに向かって行くデジモン達を見た兄さんは決意したように言うとデジモン達を追いかけて走り出した。

光子郎さんと一緒に兄さんを追いかけているがメラモンを見ると、右手に生み出した火の玉をピヨモンに向けて放ち直撃したピヨモンが落下かいていくところだった。

「ピヨモン…」

デジモン達が空さんの元にたどり着くなか、空さんはピヨモンの名前を呼びながら地面に手をつき俯いてしまう。

「おい、みんなもピヨモンを応援するんだ」

「お願いします、テントモン」

「リュウダモンはピヨモンの所に行ってあげて」

遅れて到着すると兄さんと光子郎さんはメラモンへの攻撃を指示する。

接近戦主体のリュウダモンは不利だと思い指示すると、理解してくれたのか頷くだけでピヨモンの方に駆けて行った。

「ベビーフレイム！」

「プチサンダー！」

「プチファイアー！」

「エアースhots！」

薄ら笑いを浮かべて見下ろすメラモンに4匹の必殺技が命中する。
しかし、メラモンにダメージはなく必殺技を受ける度に少しずつ大きくなっていく。

「俺は燃えてるんだぜ！」

「メラモンには炎は効かないのか？」

「みんなのエネルギーを吸い込んでいるんです」

必殺技を受けながら平然と声をあげ巨大化していくメラモンを見ていた兄さんの呆然とした様子の言葉に光子郎さんが答える。

「フッフ、燃えてるぜえ」

攻撃が止み巨大化が止まったメラモンはその巨体で崖を滑り降りる。真下にいた兄さんと光子郎さん、そしてデジモン達はその迫力に思わず目を瞑るなか、ピヨモンの方を見ると辛そうなピヨモンにリュウダモンが手を貸し立ちあがらせていた。

「空が危ないのに……こんなところで負けてられない！」

ピヨモンがそう言うと、空さんのデジヴァイスが光りだしピヨモンが光に包まれる。

「ピヨモン進化！………バードラモン！」

進化を終えたバードラモンが光の中から飛び出すのと同時に俯いていた空さんが顔をあげた。

「ピヨモン！」

空さんがピヨモンの名前を叫ぶと、それに答えるようにバードラモンが鳴き声をあげながら目の前に迫ったメラモンに翼を使い体当たりする。

バードラモンは翼にメラモンを引っ掛けたまま上昇すると崖の上にメラモンを落とした。

「ピヨモン……バードラモンに進化した」

空さんは呆然とした様子で呟き、兄さんたちも啞然とした様子でバードラモンを見ている。

落とされたメラモンは立ち上がると右手に火の玉を生み出す。

「バーニングフィスト！」

バーニングフィスト

メラモンの声と共に放たれた火の玉がバードラモンの背中に命中するがダメージはなく、バードラモンは向きを変えメラモンに向かって行く。

「俺はメラメラに燃えてるぜ」

向かってくるバードラモンにメラモンは連続で火の玉を放つ。

バーニングフィスト

「バードラモン頑張って！」

空さんの応援を受けたバードラモンは一度メラモンから距離をとり上空に上がる。

「メテオウイング！」

バードラモンがそう言い翼を広げるといくつもの炎の塊が生み出される。

バードラモンの羽ばたきと共に放たれた炎の塊はメラモンに向かつて真っ直ぐ飛んで行く。メテオウイング

それに対してメラモンは吸収しようとした腕を広げ炎の塊を受け止めるが、突然苦しみだし小さくなりながらうずくまる。メテオウイング

次の瞬間、メラモンの背中から黒い歯車が飛び出し遥上空で爆発した。

「あれは…黒い歯車」

「ああ」

同じように黒い歯車を見ていた光子郎さんと兄さんがつぶやくなか、退化したピヨモンが空さんの胸に飛び込み喜び合い、後ろからはピヨコモン達の喜ぶ声が聞こえてきた。

その後、水が戻り始めた池からピヨコモン達をみんなで協力して連れ出しているうちに夕方になっていた。

「メラモン目が覚めた？」

「私は、どうして…」

「良かった、メラモン目が覚めた」

「どうして暴れた？何があった？」

池のほとりにみんなが集まり、中央に座るメラモンにピヨコモン達が次々に質問する。

「空から齒車が落ちてきて、それから…」

ピヨコモンの質問に答えようとするが、思い出せないようだ。そんな様子をタケル君と一緒に足を水で満たされた井戸に突っ込んで聞いている。

その後しばらく話してからメラモンはピヨコモンに改めてお願いされてみはらし山に戻って行った。

「もう悪いデジモンに戻るなよー」

兄さんがメラモンの後姿に声をかけ、みんなが無言で見送っていると突然誰かの腹が鳴った。

「そうだ、ピヨコモン達にご飯ご馳走してもらおう約束」

空さんに抱っこされたピヨモンが言うみんな思い出したようだ。

「僕、お腹ぺこぺこ」

『まかせとけー』

『やったー』

タケル君の言葉にピヨコモン達が声をそろえて答えると、僕達も声をそろえて喜びの声をあげた。

「……………」ご馳走ってこれかよ」

兄さんは手に持った木の器を覗き込みながら呟く。

僕の手の中にも同じものがあり、器の中には朮のような種が一杯に入っている。

しばらくみんなの様子を見てみると我慢できなくなったタケル君が食べ始める。

「背に腹は代えられないか」

「食っちゃおう、食っちゃおう」

そんなタケル君を見ていたヤマトさんが決意したように言い食べ始めると兄さんも食べ始める。

兄さんに続いて器の中身を掴み口に放り込むと空腹のせいか思ったより美味しく感じられた。

「えー、マジ？」

「よく噛めば食べられないこともないよ」

食べ始める兄さん達を見て空さんが驚いたように言つと丈さんが平然と言う。

「いやーん、私やつぱりお家に帰りたい」

そんなやり取りを聞いてミミさんが我慢できないように叫び声をあげると、みんなが笑い出し村全体が笑いに包まれた。

第四話（後書き）

後半は急いで書いたのでミスが有るかもしれませんが。
誤字・脱字、おかしい点があったら教えてください。

次回は原作第五話。

来週の日曜日の更新を目指して頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1816y/>

デジモンアドベンチャーの世界に転生しよう

2011年11月27日18時51分発行